様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０１０４

研究課題名（和文）言説の生＝政治――戦時下日本語文学に関する総合的研究

研究課題名（英文）Bio-politics of discourse : Comprehensive Study of Japanese literature during World War II

研究代表者
五味渕　典嗣（GOMIBUCHI, Noritsugu）

大妻女子大学・文学部・准教授

研究者番号：１０４３３７０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、日本の戦時体制が当時の文学生産の場にどのような影響を与えたかを明らかにするために、当時の内務省や軍の内部文書を分析、戦時期の検閲コードについて検討した。その結果、日本国内で展開された厳格なメディア統制と国際的な宣伝計画との間に密接な関係性が指摘できることが明らかになった。
　また、とくに石川達三『生きてゐる兵隊』や火野葦平『麦と兵隊』に注目し、日本軍に従軍した兵士や従軍記者が執筆した従軍体験記に見られる戦場表現の特質について検討した。

研究成果の概要（英文）：This research examines the censorship codes in wartime Japan through analyzing documents, issued by the Ministry of Home Affairs and the Imperial Japanese Army, in order to reveal how the Japanese war regime influenced literary productions in Imperial Japan. What is observed is as follows: the close relationship between the war regime’s strict controls over the media and its international strategy for the proliferation of its propaganda.
Also, this research explores the peculiarity manifested in descriptions of battlefields. It focuses on not only war notes, written by Japanese soldiers as well as by war correspondents, but also literary works, such as Ishikawa Tatsuzo's ”Living Soldiers” and Hino Ashihei's ”Wheat and Soldiers”.

研究分野：日本文学

キーワード：戦争文学・戦記テクスト　日中戦争　メディア　プロパガンダ　アジア・太平洋戦争

１．研究開始当初の背景

(1)　本研究課題は、研究代表者がこれまで受給してきた科研費研究課題「《文学》の生存戦略――戦時下日本語文学の再審に向けて――」（2009-2011 年度、若手研究(B)、課題番号 21720074）、「旧植民地地域発行日本語逐次刊行物に見るメディアの共同性構築機能についての研究」（2006-2007 年度、若手研究(スタートアップ)、課題番号 18820025）の延長線上に着想されたものである。

先行する研究課題では、日中戦争期からアジア・太平洋戦争期の日本語の文学言説について、異なる二つの観点から再評価する必要性について議論した。すなわち、①文学言説の市場の縮小という状況認識を持った一部の書き手が、文学言説の生産・流通・消費にかかわる既存の環境を守るために、女性や植民地出身者、軍人や兵士らによるテクストを積極的に「文学」の周縁に導入していたこと、②言論の検閲・統制が厳しさを増す中で、出版事業者や編集者といった立場の人々が、対抗的言説の発信の場所をどうにか確保しようと権力との交渉を続けていたこと、という二点である。これらはいずれも、文学・文化言説の送り手の側に注目、その能動性・行為者性に焦点化した考え方である。だが、こうした問いをより適切に考えるためには、日本帝国の戦時体制期における言説の生産・流通がどんな法や制度の下にあり、現実にはいかなる場面で、誰の、どのような干渉と介入がありえたかを具体的に検証する作業が欠かせない。そのことをより明確に描き出すことができてはじめて、同時代の行為者たちが、そうした〈力〉の干渉とどのように向き合い、受け止め、いかなる〈力〉を呼び出すことで対抗しようとしていたかを考察できるからである。

(2)　一方で、2000 年代の日本語の人文学において、検閲を主題化した研究の進展には目覚ましいものがあった。プランゲ文庫資料の調査・検討が強力に進められることで、占領期の GHQ／SCAP による検閲の実相が相当程度明らかになったのみならず、占領期の言説空間総体を問題化するような、多くのすぐれた仕事が登場していた。また、その動きに刺激を受けるかたちで、戦前期の内務省警保局を中心とした検閲のシステムについても、資料に即した検討が始まっていた。しかし、そのちょうど中間の時期、日本帝国の戦時体制期のそれについては、当時を生きた関係者による回想や証言の類は多く存在したものの、言論統制・検閲の実際的な様相や、法・制度的な仕組みにかかわる検討は、意外なほど進んでいなかった。戦場表象の規制や世論指導を軸に組み立てられていた戦時期のメディア統制・言論統制を、あらためて実証的に検証し直すことの重要性が実感されていたのだった。

(3)　加えて重要なことに、研究代表者も参加した国際的・学際的な共同研究プロジェクトの中で、この時期のメディア統制・言論統制は、満洲国を含む帝国の圏域において、人間と情報とノウハウとを交換し合いながら進められていた可能性が見えてきていた。当時のいわゆる〈内地〉では、既存官庁の情報関連部局を統合して 1940 年に発足した情報局が、戦時体制期のメディア統制を主導していくが、それ以前の段階から、言葉に介入し干渉しようとする統治権力の視線は、帝国の圏域を移動・環流しながら、生成変化し、進化を遂げていた節がある、というわけだ。だとすれば、日本語で書かれ、日本内地で書かれ読まれた言葉に作用した〈力〉について考える際にも、現在の国と言語の境界を前提としないアプローチが求められることになる。日本文学研究のようなナショナルな枠組みに自足しない、国際的・学際的な研究のアプローチと協働体制の構築が必須だったのである。

２．研究の目的

本研究課題の目的は、以下に述べる３点に概括できる。

(1)　日中戦争・アジア太平洋戦争期の日本語メディアに対する管理・統制にかかわる制度と運用の実態について、政府部内資料等を参照しつつ実証的に明らかにすること。その際、日本帝国の各地域や満洲国の情報宣伝関係部局どうしの連携、情報交換の様相に着意すること。

(2)　戦時体制期に簇出した各種の文学者・文化人団体や、軍・政府機関に近い場所・組織で活動した書き手たちの実践を、帝国の統治権力とのかかわりの中で検証すること。その際、出版事業者・編集者・ジャーナリストなど、媒介者的な役割を担った行為者たちの問題意識や活動に焦点を当てること。

(3)　上記(1)(2)を踏まえ、日本の戦時体制期に思想的・文学的なルーツを持つ書き手が、複数化した権力からの干渉と交渉しながら、どんな制約の中で、どんな狙いと課題をもって発言・創作していたか、同時代の文脈に即した再評価を行うこと。

３．研究の方法

研究実施期間の３年間を研究の〈離陸期〉〈展開期〉〈完成期〉に区分した上で、計画性と継続性を重視した研究活動を心掛けた。方法的には、以下の３点に留意した。

<u>(1) 国内外の図書館・資料館・文学館での新聞雑誌資料調査と個人作家関係資料調査</u>。国立国会図書館、日本近代文学館、慶應義塾大学図書館、同志社女子大学図書館、韓国国立中央図書館などで日中戦争期・アジア太平洋

戦争期の言説資料の集積を進めた他、北九州市立図書館寄託火野葦平資料、秋田市立中央図書館所蔵石川達三資料など、個々の書き手にかかわる原稿・書簡・メモ・日記等の自筆資料について、継続的な調査を行った。また、これまで文学研究があまり参照してこなかった政府資料・軍の内部資料にも視野を広げ、戦時報道にかかわる検閲の実態や、言論統制・世論指導の指針を確認した。こうした作業を経ることで、新聞・雑誌・単行本レベルで公になった言説を、当時語られなかったこと／語れなかったことを勘案しながら、より立体的に捉えることが可能になった。

(2) これまでの研究で培った人的ネットワークと研究環境を活かし、国内外の研究者との連携をさらに推し進めた。2013（平成25）年度からは、科研費プロジェクト「朝鮮近代文学における日本語創作に関する総合的研究」（2013-2015年度、基盤研究（B）、研究代表者：波田野節子）に参加、日本帝国の戦時体制期における植民地での日本語創作に関心を持つ研究者と議論を重ねた。また、2012年度には東京で開催された「日韓国際検閲会議」、2013年度には韓国・ソウルでの国際ワークショップ「下からの綴り方、他者の文学」、2014年度にはアメリカ合衆国・シアトルでのラウンドテーブル「Periodicals and Serialization in Asia」、台湾・新北での国際ワークショップ「日本近現代文学・文化研究の最前線」でそれぞれ報告を行い、問題意識や研究対象を共有する内外の研究者との対話の機会とした。そのうち、複数の研究者とインターネット等で緊密に連絡を取り合い、研究プロジェクトに関わる情報交換を行ってきた。

(3) 研究の現在的意義の確認と発信。日本を含む東アジア諸国がナショナリズム的な感情を刺激しあっている現在、日本帝国の戦争の記憶を各国がどのように位置付けてきたか、そこにどんな人々の〈声〉がかかわってきたかをあとづけることは、まさに喫緊の課題だと言えよう。戦後70年の節目を控え、本研究課題の現在的意義を確認し、本研究から展開可能な問いの地平を同定することを意図して、21世紀の〈新しい戦争〉の段階における戦争とプロパガンダのあり方や、現代日本の戦争記憶の語りと表象に関する研究・批評を積極的に参照した。とりわけ、戦時体制期の日本帝国による戦争責任・加害責任の記憶がどのように語られ、継承され／断絶しているかに注目、映画やテレビドラマを含むメディア上の記憶の表象だけでなく、日本国内の各地域における記憶をめぐる抗争と葛藤のありようについて、フィールド調査や聞き取り調査も行いながら、検討を進めた。

４．研究成果

本研究の主な成果として、以下の(1)～(4)を挙げることができる。なお、ここで得られた成果と知見は、2015年度以降、科研費研究課題「日中戦争の記憶と表象に関する総合的研究――1940-1960年代を中心に」（研究代表者、挑戦的萌芽研究、2015年度-2017年度、課題番号15K12852）、「昭和10年代における文学の〈世界化〉をめぐる総合的研究」（研究分担者、基盤研究（C）、2015-2017年度、課題番号15K02243）の中で、引きつづき深化させていく予定である。

(1) 石川達三『生きてゐる兵隊』（『中央公論』1938年3月号＝発売禁止）が、日本軍の南京とその近郊での蛮行を証し立てるテクストとして、上海の国民党系夕刊紙『大美晩報』で中国語に抄訳掲載されてしまったことは、当時の戦争遂行権力、とくに軍と情報当局に大きな衝撃を与えた。すでに『LIFE』誌に掲載された戦場グラフ写真がセンセーションを巻き起こしていた上海戦の報道に加え、南京作戦においても、国際的な情報戦争で手痛いミスを犯したと意識されたのである。とりわけ、両作戦の当事者であり、国際メディア都市・上海での宣伝工作を担当していた中支那派遣軍の衝撃は大きかった。軍は、弛緩しきった軍紀の引き締めに躍起になる一方で、東京の情報当局と連携した、情報戦略の立て直しを迫られていたのである。

そこで発見されたのが、杭州湾上陸作戦に従軍後、出征前に地域の同人雑誌に発表した小説で芥川賞受賞が決定した火野葦平＝玉井勝則だった。中支那派遣軍は火野を報道部に抜擢、徐州作戦に従軍させ、その体験記の執筆を慫慂する。『生きてゐる兵隊』とは異なる兵士たちの日常と戦場での沈着な克己心を主題化した火野の『麦と兵隊』は、当時の軍・情報当局による半ば公的なテクストとして発表され、ベストセラーとして銃後の国民にも迎えられた。しかも、陸軍と内務省とが日中戦争当初から練り上げていた検閲のコードに依拠して書かれた火野のテクストは、非戦闘員としての中国人農民と日本軍将兵との連続性・近接性を表象レベルで担保しつつ、〈敵〉たる中国軍将兵の描写を排除していくという特徴的な構造を持っていた。こうした戦場表現のスタイルは、戦争目的も〈敵〉のイメージも曖昧なものでしかなかった日中戦争期において、日本軍の従軍者が大量に公刊していく従軍体験記テクストのスタンダードとなっていく。

(2)『麦と兵隊』の成功は、戦争遂行権力にとって、国内世論を作り上げ、一つの方向へと振り向けていくうえで、文学テクストがいかに有用かを強く意識させることになった。軍と内閣情報部は、1938年8月に下令された武漢作戦に、「従軍ペン部隊」と呼ばれた文学者・文化人のグループを組織的に従軍させ

ることを決定する。陸軍・海軍に割り当てられた 22 名の書き手たちは、確かに決してインパクトのあるテクストを残したわけではなかった。しかし、この企画は一大メディア・イベントとして同時代の新聞や雑誌で大きく取り上げられただけではなく、文学者・文化人を国家権力に包摂していく上で決定的な契機となった。物語を書く欲望への忠実さを離れられない文学者をあらかじめ囲い込むことで、彼ら彼女らの言葉を統制することが試みられたのである。この経験は、1941 年 11 月に始まる〈文士徴用〉の直接の先例となった。

また、武漢作戦時に従軍報道関係者に配付された文書からは、日本語のテクストが他の言語に翻訳されることを前提に言論や報道に対する指導・統制が行われ始めたことを窺知することができる。当時の軍・情報当局は、第一次世界大戦時のドイツを念頭に、国内世論の分断・分裂に神経を尖らせていたが、そこで主唱された「防諜」という発想の中には、日本帝国の外部のメディアで、国論が割れているという印象を与えないという目的も含まれていたのである。帝国の内部でのメディアと言説の統制は、明らかに対外情報宣伝とリンクするかたちで行われていたのだ。

(3)　メディアや文学者たちにとっても、『麦と兵隊』の成功は重要な意味を持っていた。『生きてゐる兵隊』の事件以後、メディアや書き手は戦場を描くテクストの執筆・発表に対してかなり慎重になっていたが、火野のテクストは、いわば〈許容される表現〉の枠組みを示すことになったのである。「従軍ペン部隊」に参加した書き手たちは、軍や情報当局から示された期待に則るかたちで、中国大陸にまでいびつに拡大してしまった日本社会の〈絆〉を結び直そうとする言語行為を展開しようとした。すなわち、速報性を重視する新聞報道がフォローしきれない、前線近くの将兵の〈苦心〉〈労苦〉を積極的に主題化していったのである。

また、「従軍ペン部隊」の企画は、文学者たちに、国家権力に接触し、公的な役割を担うという新たな活躍の場面を教えることになった。1930 年代を通じて書き手たちは、文学言説の市場規模の縮小と、文学者の供給過剰という状況に苦しんでいたが、「従軍ペン部隊」の〈成功〉以後、書き手たちは、まさに自らの生存戦略の一環として、各省庁や公的機関でのプロパガンダ的活動を積極的に担当するようになっていく。1940 年の「新体制運動」以前の段階で、「農民文学懇話会」「大陸開拓文藝懇話会」など、各種文学者団体が多く作られていった背景には、こうした事情が潜在していた。

(4)　国家が戦争を遂行するためには、〈国民〉による積極的／消極的な支持の調達はむろんのこと、少なくとも戦争には反対しないという空気を醸成することが欠かせない。そこで決定的に重要となるのが、〈戦場〉のリアルを刻んだイメージや言葉をどのように管理するか、という問題である。なぜなら、〈戦場〉の表象は、戦争と銃後の日常とが地続きであることをアピールし、〈敵〉に対する憎しみや怒りを喚起する有力な資源となる一方で、〈戦場〉でしばしば起こる人間の怪物化、心理的な変調、あまりに残酷な人間身体の破壊のイメージは、戦闘行為自体への嫌悪や倦厭を引き起こすことにもなるからだ。だからこそ国家は様々な方策を用いてメディアの統制を行うのだし、メディアの側も、資本主義的な利益への関心や、自分たちの見たくないものは見ないという市民社会の欲望と馴れ合うかたちで、国家権力との共犯関係を取り結ぶのである。

20 世紀の戦争は、〈戦場〉の全景を見渡すことの困難と、人間の知覚の限界を将兵たちに突きつけることになった。その条件は、ハイテク化した現代の戦争ではますます一般的なものとなったと言える。つまり、現代の人々が認知できる〈戦場〉の表象は、原理的に不十分なものでしかない。だが、〈リアリティ〉を感じる水準自体に介入しようとする国家権力の視線と欲望への認識を深めることで、ある記述やイメージと向き合う際に、表象されていたかも知れない別の記述やイメージとのかかわりとを想像しながら、複眼的に吟味することが可能になる。本研究が取り上げた 20 世紀の戦争は確かに過去の戦争だが、〈戦場〉の本質が変わらない限り、〈戦場〉の表象をめぐる問いは、何度でも問われ続けなければならない。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　7　件）

(1)　五味渕典嗣、友情の効用――小林秀雄と火野葦平――、大妻国文、査読無、46 号、2015、63-81

(2)　五味渕典嗣、曖昧な戦場――日中戦争期戦記テクストと他者の表象、昭和文学研究、査読有、69 集、2014、36-47

(3)　五味渕典嗣、方法論の現在　メディア・出版文化論、日本近代文学、査読有、90 集、2014、196-200

(4)　五味渕典嗣、文学・メディア・思想戦――〈従軍ペン部隊〉の歴史的意義――、大妻国文、査読無、45 号、2013、93-116

(5)　五味渕典嗣、核関連広報施設を見る――六ヶ所村・東海村訪問記、原爆文学研究、査読無、12 号、2013、205-214

http://www.genbunken.net/kenkyu/12pdf/13gomibuchi.pdf

(6)　五味渕典嗣、戦場のエクリチュール――日中戦争期戦記テクストの言語空間――、国語と国文学、査読有、90 巻 11 号、2013、126-137

(7)　五味渕典嗣、凍りつくことば――『雪国』論ノート、大妻国文、査読無、44 号、2013、127-144
https://otsuma.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=5662

〔学会発表〕（計　7　件）
(1)　五味渕典嗣、戦争文学／戦記テクストの戦場表象、国際ワークショップ「日本近現代文学・文化研究の最前線」、2015 年 3 月 22 日、淡江大学（台湾）

(2)　五味渕典嗣、日本における〈戦争の記憶〉の現在形、ラウンドテーブル「Periodicals and Serialization in Asia」、2014 年 10 月 3 日、ワシントン大学（アメリカ合衆国）

(3)　五味渕典嗣、核を見せる文法――核関連ＰＲ施設をめぐって、2014 年度科学史学会生物学史研究会、2014 年 4 月 26 日、東京大学駒場キャンパス（東京都）

(4)　五味渕典嗣、エドワード・マック、千政煥「境界の危機――読者・表象・敵対性」、2013 年度日本近代文学会 12 月例会「国際研究集会――日本近代文学のインターフェイス」、2013 年 12 月 1 日、日本大学文理学部（東京都）

(5)　五味渕典嗣、曖昧な戦場――日中戦争期戦記テクストにおける他者の表象、国際学術会議「下からの綴り方、他者の文学」、2013 年 11 月 8 日、東国大学校（韓国）

(6)　五味渕典嗣、国策と娯楽のあいだ――『蘇州の夜』をめぐって――、大妻女子大学人間生活文化研究所共同研究プロジェクト「近代日本文学とイメージとの関わりについての研究」ワークショップ、2013 年 2 月 8 日、大妻女子大学千代田キャンパス（東京都）

(7)　五味渕典嗣、ペンと兵隊――戦記テクストの〈情報戦〉――、第４回日韓国際検閲会議、2012 年 9 月 15 日、日本大学文理学部（東京都）

〔図書〕（計　1　件）
(1)　五味渕典嗣、ゆまに書房、コレクション・モダン都市文化 96　中国の戦線、2014、1005

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　五味渕　典嗣（GOMIBUCHI,Noritsugu）
　大妻女子大学・文学部・准教授
　研究者番号：１０４３３７０７

(2)研究分担者
　なし

(3)連携研究者
　なし